

Oblivescence

彩野

葉書には、新年のあいさつと、場所と日時が記されており、短く、会いたいということが書かれていた。

実家からの連絡を受け、僕は正月に親の顔を見に行くことにした。出迎えてくれた二人は元氣そうなふりを見せていたが、顔に刻まれたしわと華奢になつていく後姿がそこにはあり、早々と年賀状だけ受け取ると、白い息を吐きながら車まで走った。

運転席について、あらためて年賀状を見る。実家の住所と僕の名前、そして、差出人の名前が表に書かれていた。丁寧に整ったその文字を見て、彼女の性格を思い出し、僕は安心を覚え、そして、彼女の名前が今も昔も変わっていないことに一抹の不安を感じた。

あけましておめでとうございます、突然ですが、とはじまり、一月三日の三時に僕たちの卒業した高校で会えないかという旨が書かれていた。

三日は今日だ。母親が、その内容を読んで僕に電話してきたのが、昨日の夜だった。配達されたのが昨日であることを考えると、いささかこの約束は急すぎる。おまけに、僕はもうすでに実家を出ていて、ここに帰ってくるためには、自動車で二時間はかかる。相手

は、僕が実家に戻っていると思っていたのだろうか。音信が途絶えてから、もう五年以上たった今、彼女は試している。こんな突然の約束に、僕が動いてくれるかどうかを。

気に食わないが、呼ばれているならしょうがない、と僕はギアをドライブに入れる。久しぶりに会うのも悪くないし、お互い別々の道を歩いているのだから、積もる話もたくさんあるだろう。何か相談があるのかもしれない。

彼女は、どうなっているのだろうか。

高校を卒業して、今年で十年を迎える。

高校二年の夏、僕には二つの事件が起きた。

ひとつは、叔父の死。

父の弟だった叔父さんが自宅で風邪をこじらせてそのまま帰らぬ人となった。叔父さんは画家で、油絵を描いて生計を立てていた。正確には、各方面から資金を工面してもらっており、かなり貧しい生活を送っていたようで、正月か借金の申し込みでしか顔を見せな

い叔父さんだった。風邪をこじらせたのも、画材を買うために食費を削り、栄養失調と過労により、風邪から肺炎を併発して、元来、丈夫な体ではなかったため、病院のベッドで点滴を打たれながら静かに眠るように息を引き取った。

父とは十歳以上も離れており、そんな弟が可愛かったのか、親戚一同、葬式では邪魔者が消えた安堵感をもたらしていたが、父だけは涙を流して悲しんでいた。僕は、叔父の金を借りるための媚びた笑顔は苦手だったが、キャンバスに向かい筆を振るう真摯な姿が好きで、叔父の家によく遊びに行った。

叔父の家と僕の実家とは、電車で一時間以上もかかったのだが、それでもひと月に一度は顔を見せに行っていたのだが、高校生となり、勉強に学友との交遊が日常を支配し始めて、叔父に向く足が次第に失われていった。

彼が死んだとき、僕はひどく後悔した。もっと叔父を大事にしていれば、彼の絵を見に行っていれば、元に戻りはしないのに、もしも、ということばかりを考えていた。

主のいなくなった家は不気味で、そこを引き払うために、父はそれなりの労力をかけた。まず、乱雑に置かれていた完成しているのか未完なのか分からない作品と家具を処分し、こまごまとしたものを分類していかなくってはならなかった。

一人では大変だから、ということ、僕も父に同行して叔父の家で片づけを手伝った。

そこで、黒いカメラを見つけた。

叔父は写真もやっていたのか、と父に尋ねてみると、それは自分が買ってやったものだと言ってくれた。ちようど、叔父が僕と同じ年の頃にだという。

僕は魅入られたように、そのカメラを手にして、ファインダーの中を覗き込んで周りを見回して、部屋の一角をその四角の中に捉え、シャッターを押した。

一瞬、白い少女が見えた。

驚いた僕はカメラから目を離して、あたりを見回すが、もうその姿は見えなかった。父は不思議そうな顔をして、そのカメラが欲しいなら持つていくといい。捨てるなら、誰かが使っていた方がいいからな、と言った。父からフィルムの換え方やピントの合わせ方

などを簡単に教わり、カメラは僕のものとなった。

不可解なことが起きているというのに、僕は怖いと思うことがなかった。むしろ、胸は高まり、シャッターを切る度に同じ少女がそれぞれの景色のどこかに忍び込む瞬間が、たまらなく嬉しいものであり、叔父の死を癒してくれる存在であった。そして、この体験は僕一人だけのもので、誰にも言わなかった。

誰かに教えれば、その少女は消えてしまう、そんな予感がした。

これが、僕に起きた叔父の死を含む事件のひとつだ。もうひとつは、その二週間前に起きた。

「一緒に来てくれよ」

相川春海は、いつも通りだった。

ぶつきらぼうな態度で、外側の人間からすれば、春海が僕を脅している様に聞こえる。しかし、いつもはきりつと伸びた眉尻が下がっていた。それが、彼が本当に困り果てて僕を頼ってきているということ、僕は既に知っていた。

「ひとりで行けよ」

「絶対に無理だ。どうすればいいか分からない」

「別に、普通だろ。適当に遊んで、適当に飯食って、それだけだろ」

「普通って何だよ」

「いや、だから、普通は普通だろ」

この問答も三十分以上繰り返していると、さすがに疲れてくる。相手が春海だと尚更だ。僕は、こういうとき彼が折れないということ嫌というほど味わい、さらに、結局は僕が従うということ、身をもつて知っていた。

わかったよ、と僕が仕方なしに首を縦に振ると、彼は唇の端をあげて僕の肩を叩いた。

「やつぱり、俺たち親友だな。心の友よ」

「どこかのアニメのガキ大将と同じだな、お前は」

無理やりにはあるが、僕は内心の緊張を抑えることに必死だった。

春海の頼み事とは、彼の初デートに同行することだった。そして、彼に告白し、デートの誘いをしてきた彼女は、同学年の女子の中でもとびきりの美人であ

り、僕から見れば高根の花だったからだ。

そのときの僕は、彼女と話した一言を思い出していた。授業で使うプリントを両手に抱え、彼女は教室のドアの前に立ち、どうやってドアを開けようかと考えていた。そこに、たまたま居合わせた僕が、彼女の代わりにドアを開けてあげた。そして彼女が、ありがとうと小さいけれど優しい感謝の言葉をくれたのだ。形の良い唇、ずっと細くなった瞳、その笑顔に憧れる男子の気持ち痛みほど身に染みした。

吉野さゆり。僕はその笑顔を忘れないだろうと思った。その彼女の恋心を、春海が掴んだのだ。それが、ほかの男子だったら、それほど彼女に心を奪われていない僕でも、嫉妬の念が微かにでも現れたかもしれないが、春海が相手ということならば、誰もが納得するだろう。

彼もまた整った容姿を有していた。表情は乏しいが、それが彼に硬派な印象を与え、恵まれた肉体は抜群の運動神経を発揮していた。成績も良く、誰に対しても同じ態度をとり、たとえばそれが先生だろうとも、自分が間違っていないと思ったら、梃子でも動かないとい



う筋金入りの性格も女子からの恋慕、男子からの羨望を集めていた。

ただそれは上っ面の相川春海の姿であり、僕の前でだけ、彼は自己中心的で、下心の化身のような性格を隠さずに出していた。極度の人見知りだが、他者からは、口数が少なく孤高のイメージを与えているにすぎないのだった。

なぜ彼が僕にだけ、本当の姿をさらせるのかは、高校一年の始業式の日に戻るのだが、あまりにも単純な理由だった。

僕の名前が、麻木好人であり、出席番号が彼の後ろで、なおかつクラスに友達がいなかった彼に気さくに話しかけたという理由だけだった。それを、僕はからかって、卵から孵ったばかりのヒヨコみたいだな、と揶揄すると、彼は恥ずかしがることなく、刷込みだろ、とけろつと答えた。

そんな彼だから、今まで無数の女性がアタックしたものの、緊張して黙って突っ立ったままの彼の前で、振られたものと思ひ込み散っていったのだが、吉野さんにだけは、春海も精一杯の力を振り絞り、顎を動か

すことができたようだ。

「しかし、女心は本当にわからない」

頭を抱えた春海が呟いた。

「そんなもんだろ。男にはきつと一生わからないな」

「羨ましい。そんな好人に俺はなりたい」

「僕は春海になりたいよ。そしたら、何でもできそう  
だ」

「どうか。女の子とひとりでデートすることもできない  
チキン野郎だ。そんなチキン野郎で、おまけに  
むつつりスケベなのに、あの吉野さんが告白してくる  
んだから信じられない」

「とりあえず、毎朝、鏡を見て他の男子と自分を見比  
べろ。自覚しないのはいいことだが、あまり度が過ぎ  
ると厭味に聞こえる」

「何で？」

「うるさいな。一般人のひがみを聞き返すな」

吉野さんは、デートの待ち合わせ場所と日時しか  
言ってなかった、と春海は憤った。

「具体的な内容は男が決める、エスコートは男性側が  
基本ということだろう」

「勝手すぎる」と春海が嘆く。「誘ってきたほうが考  
えるべきだ」

「男性を優位に立たせようとしてるんだよ。それくら  
い分かれ」

「分からないね」

「本当に強情な奴だな」

「それなら、好人が考えてくれ」

「何を？」

「俺たちのデートプランに決まっているだろ」

「はあ？」

「頼むよ。向こうは俺に任せて、俺はお前に任せた。  
これでどうだ？」

「どうだと言われても、と僕が困惑と諦めの表情をし  
ているにも関わらず、春海は自分でその答えに納得し  
て、満足な笑みを浮かべていた。

昼休みが終わるチャイムが鳴り響き、疎らだった教  
室に生徒たちが戻り始める。僕は、おい、とか、  
ちよつと、という言葉を春海に向けて投げかけたけれ  
ど、彼はまったく意に介さずに、さつさと次の授業の  
準備を机の上に並べだしており、僕は春海の頼み事を

断ることが出来ず、他人のためにデートの計画を立てることになった。

お腹が痛くなったことを、とてもよく覚えている。

それは、すごく奇妙な光景だった。

告白して、デートしているはずの二人は、常に僕を通訳として会話をしているようだった。春海はいつものように、女子の前で上がりまくっており、そのせいで支離滅裂となった彼の気持ちをくみながら、僕はそれを吉野さんに伝えなくてはならなかった。ただ、それは吉野さんも同じで、クラス委員の時のような明朗なしゃべり方はどこへやら、こちらも奥歯に物が詰まっているかのように途切れ途切れで、僕は両者の間に立たざるをえなかった。

ボーリング場で軽く体をほぐした後、昼食はお洒落な洋食屋を選んで、ウインドウショッピングを楽しみ、僕たちの初デートは終了した。

「また、学校でね」

白く長い手を振って、吉野さんは駅の人混みにまぎ

れていった。

僕らも手をあげて彼女を見送り、そして襲ってくる疲労を肩で受けて、近くのファーストフードで腰をおろして反省会を行った。

彼女を満足させられただろうか、昼はあれでよかったのか、もしかして映画の方が良かったのか、引き止めて夕食まで一緒にすれば、無理にでも何か買ってあげたら喜んでくれたかな。

「僕がいない方が良かったんじゃないかな？」

僕の問いに対して、春海は何の躊躇いもなく言い切った。

「好人がいなかったら、きつと一分も持たなかった」  
それに僕は頷き、きつと吉野さんも同じことを思っているんじゃないかな、と勝手な想像をした。

この件をきっかけに、僕たちは三人で過ごすことが多くなった。

学校でも、放課後でも、休日でも。夏も秋も冬も春も。僕と春海が話しているところに、吉野さんが入ってきたり、僕と吉野さんが立ち話しているところに、春海が混ざってきたり、春海と吉野さんが二人きりでも

じもじしているところに僕が通りがかって二人に引つ張られたりと、いろんなところで僕たちは遭遇し、一緒の時間を共有し合った。

金曜になると、自然とみんな中庭に足が向き、同じベンチに腰かけて土曜日の相談を始める。

こないだは、遠出をしたから今度は近場で遊ぼう、新しいゲームを買ったから一緒に遊ばないか、靴が欲しいから二人に見繕って欲しい。

そんな、他愛もない会話を繰り返しているうちに、分かったことがひとつある。

吉野さゆりは、相川春海とよく似ているということだ。それまで大人しいという印象が彼女の中にあつたが、本当は好奇心旺盛な女子であり、ただそれを人前で声に出すことを極端に恥ずかしがっているということが分かった。頬を赤く染めながら、疑問に思ったままを口にして、僕たちはよく彼女をからかい、それに怒る姿に僕たちは笑った。

すべてがうまく運んでいた。僕たち三人は、そう感じていた。

三年にあがり、三人の教室がばらばらになるまで。

最初におかしくなったのは、間違いない僕だ。

その頃には、叔父から譲り受けたカメラの性質を、完全に支配することができていた。

シャッターを切る度に現れる彼女。彼女は、何よりも孤独を好んだ。

雑踏の中や、どこかに人の姿が入り込むと、途端に彼女の気配はなくなり、これまで僕が見てきた記憶が薄れていき、女の子の存在が消えていくのだった。

だから、僕は自転車にまたがり、人気のない場所を探しては、そこに彼女の居場所を用意するのだった。

同じ背景では飽きると思い、たまには電車を使つて誰も僕を知らない景色を探したりもした。彼女は、冬になつても純白のワンピースと腰まで伸びた長い髪を世界に漂わせ、一瞬だけ僕の網膜に焼き付いていった。

彼女は印画紙には写らない。写真屋から帰ってくる景色には、彼女の影もなく、僕の幻想であることはすでにわかつていたけれど、僕はファインダーに刹那おさまる彼女のことを否定することができなかつた。ど

んなに忘れようと思っても、気がつけばカメラに手が伸びており、彼女の笑顔を見たいがために、僕はシャッターボタンを押し続けた。

春海や吉野さんとの仲が深くなるにつれて、写真への執着も進み、僕の人格が、それら二つの面に特化し乖離していくのを感じていた。生活の色が白と黒の濃淡の度合いを強めていく。どちらが白で、どちらが黒か。どれが正しくて、どれが間違っているのか。

永遠に続くと思っていた三人の時間は、だんだんと枝分かれした道のようにずれていった。僕はそれに気がつかなかった。その異変にいち早く気が付き、危惧していたのは、吉野さんだった。

彼女からの相談を、僕はうまく受け止めることができなかつた。

「春海君、浮気してるみたいなの」

「ウソだろ？」

これは、僕の嘘だ。本当は知っていたのだが、わざと惚けたふりをしたのだ。彼女が傷つかないように、



僕たち三人の関係を継続させるために。

「わたしの友達が見たつて」

「何を？」

「彼が女子と二人きりで歩いているところ」

「歩いてただけじゃないのか。そんなの普通だろ」

「好人君の言う普通って何なの？」

言葉に詰まる僕を見て、彼女はため息をついた。

「授業が始まる。戻らなきゃ」

教室を出ていく彼女の背中を見て、僕は安心し、そしてそうやって逃げている自分が恥ずかしくてたまらなかつた。なのに、僕の頭の中では、カメラの少女のことが一杯、で彼女を心配してやる余裕すら消え失せていた。

春海は、確かに変わった。吉野さんと長くいることで女子に対する、僕以外の人間に対する免疫ができていた。それは、彼にとって好ましい変化かもしれないが、それと同時に、彼の隣を狙う女子たちの気持ちまですり止めてしまう結果を招いた。

吉野さんは、春海のことを思うが故に彼に自らの時間を傾けていた。そのため、彼が僕を除く自分以外の

生徒たちと触れ合うことに、消極的な態度をとるようになっていた。そんなことをすれば、当然、反感を買うことになる。さすがに男子から嫌われるということにはなかつたが、同性からの攻撃は凄まじく、陰鬱とした魂を削られるような罨が日に日に増えていったように、頼りになるはずの僕たちは、新たに開いた世界に夢中で、彼女が壊れてしまうまで気がつかなくつた。

本当に、馬鹿だつた。

手首を切るぐらいでは、人間は死なない。

病院のベッドで半身を起し放心している彼女の姿を見て、僕は自分の犯した過ちに視界が暗くなつた。空想かもしれない少女に現を抜かし、大切な友人を失うかもしれないなかつたのだ。彼女の腕には白い包帯が巻かれていた。ベッドの脇の机には花瓶が置かれており、白い花が活けられていた。窓は少し開かれており、冬を匂わせる風が吹き込んでいた。

彼女が手首を切り自殺を凶つたのは、十月の終わりだつた。教室で授業を受けている僕は、突然、生活指

導の先生に呼び出され、吉野さゆりが病院に運ばれたこと、彼女が自分自身を傷つけたことを聞かされ、二人がどんな関係であるのか問いたただされた。ただされるがままの質問に答えた後、何故、自分なのかということ聞き返すと、彼女が最後に残した手紙の宛名に、僕の名前が書かれていたからだと教えられた。

春海ではなく、僕の名前が書かれていた。

病室にいた彼女の母親は、吉野さんに着替えを取ってくるという旨を伝えて、僕に小さくお辞儀して病室を出て行った。個室には、僕と彼女だけがいた。

僕は、どんな言葉をかければいいか分からず、彼女に近づくことも出来ず入口付近に突っ立っていた。

彼女の細い指が、ベッド脇のスツールを指した。

焦点の定まらない瞳は黒く、彼女の美しさをさらに増幅させていた。

さつきまで彼女の母親が腰掛けていたスツールに座った。スツールの足が擦れて、硬質な音になると、彼女がわずかに体を震わせるのがわかり、さらに痛々しかった。

それから二人は、長く口を開かなかった。お互いが、

それぞれに向ける言葉を持ち合わせていなかったからかもしれない。僕たちは、それぞれが全く別の方向に目を奪われており、それが叶わないと知りながらも、抑えることができない衝動に身を任せてしまった愚か者の集まりにすぎない。少なくとも、僕はそうだった。「なんで」

僕は言った。

「なんで、僕だったんだ？」

彼女が少し首をかしげた。黒く長髪が額に掛かる。

「春海じゃなくて、なんで」

「だって、もしも春海君の名前を書いて、もしも春海君が迷惑な顔をしたら、わたし、どうすればいいかわからなくなる。死んでもいいと思ってたのに、変だね。それでも、彼に、煩わしいと思われるくらいなら、わたしは死ぬことすら選べない」

久しぶりに聞いた彼女の声に、僕は涙を堪えることができなかった。嗚咽を漏らさないように顔を下に向けて、必死に感情を押し殺そうとした。

彼女の声は、擦れて錆びた鉄のようだった。いつからこんな声になったのだろう。そんなことも思い出せ

ない。彼女は、精一杯に僕や春海の名前を呼んでいたのに。すぐ近くで。なのに、僕には彼女の助けを呼ぶ声を聞いてやれなかった。

後悔の雨が僕に降り注ぐ。それは、一滴一滴が鉛のようによく歪んだ形をしており、悲しみの色をしていた。

「僕も、春海も、君を嫌いになるわけがないだろ」

絞り出した僕の答えに、彼女の顔がだんだんとひしやげ、嵐のように泣き喚いた悲痛な叫びが飛び出した。

誰にもわからない。春海の気持ちも、わたしの気持ちも。

それが彼女の不安だった。これは、僕にはどうすることもできなかった。すでに僕の手では助けられない溝に彼女は陥ってしまったのだ。

ふとんに突っ伏した彼女を後に、僕は病室を出た。病室のドアの陰には、春海が立っていた。二人でこの病室にきて、彼は足が竦んで動かなくなり、僕だけの中にいったのだ。

僕は、これほど感情を表に出した春海を見たことがなかった。彼もまた彼女を深く傷つけたことで、自分の重要な部分が欠落していることに気がついたのだ。

僕と入れ違いに春海が病室に駆け込んでいく。僕はもう二人を見ずに外に出た。

青く澄んだ空。どこまでも高く、耳が痛くなるほどの青だった。僕は背負っていた鞆からカメラを取り出して写真を撮った。

何気ない一枚だった。

シャッターが切れ、彼女が写る刹那。

さよなら、という声が聞こえた。

それは、遠い昔に失ってしまった声だった。

悲しみを隠して笑う彼女の顔、それが誰なのか今やつとわかった。

僕は自分の本心にたどりつき、別れを思った。

そして、父のことを思い出す。叔父の部屋を片付けていたときだ。

叔父のアトリエで、乱雑に重なっていた絵には、共通して一人の女性の横顔が描かれていた。いろんな背景を添えて、凛と遠くを見つめる姿や、瞳を閉じて甘く笑う女性は、母の昔によく似ており、変に胸が締め付けられ

たことを覚えていて。何よりも僕を苦しめたのは、無言でそれらを片付けていく父の背中であり、だから、僕はそのことを父に聞きそびれてしまっていた。

けれど、今になって、僕は叔父の気持ちがあわかってしまった。届かない、触れることすらできない、レンズ越しの花に親しみを越えた感情を抱いてしまったことを。彼は、終生孤独だった。傍には誰も寄らず、実の親すらも叔父のことを煙たがっていた。ただ、兄である父だけが叔父に優しくかった。それは、母を隣に置いていたことへの引け目なのか、それとも叶わぬ恋に焦がれている弟への憐れみなのか。僕には知る由もない。そして、僕はどうなのだろうかと自問する。

この想いは、いつかどこかに消えてしまうのだろうか。

それは、いつになるのだろうか。

その、いつか、は来るのだろうか。

それから、十年の歳月が流れた。

彼女の入院の一件は、表沙汰になることはなく、無事に退院してきた彼女の表情には、これまで通りの笑

顔が咲いており、その横には、落ち着き払った春海が寄り添っていた。出会った頃程ではないにしろ、僕たちは三人でいることが多くなった。僕は叔父から譲り受けたカメラを押し入れの奥にしまい、大量に残ったフィルムを全部捨てた。

一緒に遊びに行ったり、三人で勉強したりしながら、僕たちは短い高校生活を楽しみ、春を迎える前に、僕は地方の私立大学に通うため家を出た。二人は、地元の国立大学にともに進み、そこで、僕たちは別れた。

大学を卒業し、さらに離れた場所で就職し、彼らとは疎遠になった。最後に来たのは、二人の結婚式の招待状で、大学を卒業すると同時に籍を入れたという内容が書かれており、友人代表としてスピーチを頼むという内容があった。

きつと直接に会ってしまったら、春海に押し負けてしまうことが分かっていたので、僕は文書で断りの意を伝え、就職のため二度目の引越しをするから式には出られないという内容の手紙を送った。

二人の残念がる顔が脳裏に浮かんできたが、時間と距離をおいた僕が、どうやって二人の前に出れば良い



のか分からなかった。僕ははずいぶんと不器用になってしまった自分に、嫌気がさしていたが、それでも、昔の気持ちや尾を引き、あの二人の涙を思い出すと、あの懐かしい場所から離れたくなってくるのだった。

連絡が途絶え、五年が過ぎた今、相川になったはずの彼女が、吉野という名前で年賀状を送ってきた。

自動車を運転し、流れる景色に目をやると、学校周辺は時間が止まってしまっているかのように、僕の思い出の中の景色と何も変わっていないかった。古びた校門も、校舎の形も。僕は自動車を近くの駐車場に止めて、校門の前に立った。二階の窓の下にかかっている時計を見る。約束の時間より五分早く着いたようだ。一月の寒さが肌を刺してきた。僕はぶるつと身震いして、車内に戻ろうとしたとき、校門の向こうから歩いてくる女性に気がついた。

長く会っていなかったのに、僕は彼女のことをすぐにわかった。あの頃と変わらず均整のとれた容姿、髪は短くなっており肩にかかる程度で揃えられていた。年をとっていることを感じさせない顔だったが、時間とともに彼女は綺麗になっていた。

何よりも、あの笑顔が高校のときと同じだった。

「久し振り」

彼女が手をあげる。

「ああ」と僕もそれに応える。「それより、どうやって学校の中に入ったんだ？」

「言っただけじゃなかったか？」と彼女は笑う。「わたし、この先生になったんだよ、去年から」

「なるほど」

「さあ、入ってきて」

僕は彼女に招かれるがまま、校門の横にある通用口から学校に足を踏み入れた。

「突然、呼びだしたりしてごめんね」

「いいよ。こつちも久し振りに会いたかったし」

「そう、それは良かったわ」

彼女はくるつと踵を返して、校舎の扉を開けて入っていく。

「ここでは、寒くて凍えちゃうわ。中に入りましょう」

十年ぶりに座る椅子は懐かしく、とても小さく感じた。

教室にはエアコンが取り付けられており、先に来ていた彼女が暖房を効かせてくれていたので、僕は上着を脱いで、高校二年のとき、自分の席だった場所に座り、黒板を眺めた。

教壇には吉野さんが立ち、似合うかな、とチョークを持って黒板に文字を書くふりをした。

「羨ましいよ、君の生徒が」

「どうして？」

「こんな美人の先生に教えてもらうんだからな」

「またまた、冗談がうまいんだから」

僕は背もたれに体をあずけて、彼女を見た。

「毎日ここに立っているとね、懐かしいって思わなくなってきた、好人君みたいな反応を見ると新鮮に感じるの」

それから僕たちは、互いの仕事のことを話して過ごした。手に負えない生徒が三人いることや、文化祭で自分たちが考えた劇で感動したこと、学校という空間には独特の雰囲気があり、それが体に染み込んでくるということ。

しばらく話したあと、彼女は唐突に笑顔を消して

言った。

「聞かないんだね、何も」

僕は息をのんだ。

「何で結婚式に来てくれなかったの？」

「気恥ずかしかったんだよ、二人に会うのが」

「一緒に祝福して欲しかった。だって、わたしたちは三人で一つみたいだと思ってたから」

青かった窓からの眺めが、だんだんと朱色を帯びてくる。

「高三のとき、わたしが好人君に、春海が浮気しているかって尋ねたこと覚えてる？」

あのととき、本当は気付いてたんだ。春海に、わたし以外の女がいることに。でも、そんなこと信じられなくて、わたしは好人君に聞くことにしたの。春海が浮気しているのか。好人君は、わたしを傷つけまいとして嘘をついた。それは親切心から出たものかも知れないけれど、それでわたしの何かの糸が切れたの。別に、これは好人君のせいじゃないし、春海のせいでもない、今のわたしなら思うことができるけど。十七年しか生きていないわたしの世界はせまくて、物事

を通常よりも大きな存在であるように感じていたんだと思う。だから、わたしは手首を切るなんていう軽率な行動を取ったんだわ。

あのとき、好人君がお見舞いに来てくれて、あなたが帰ったそのすぐあとに春海が飛び込んできたから、わたしはまた彼にすがりついてしまって、また世界の色が彼に傾いてしまった。やっぱり、わたしには春海しかいないと感じたし、それでいいと思った。

けれど、結局それはまやかしだったのかもしれない。春海は、一度は振り向いてくれたけれど、それでもずっとわたしを見ていることはなかった。彼は常に届かないものばかり追いかけていたし、自分のものになると途端に興味を失うような人だった。

大学のときは良かったの。お互い違う学部で、空いた時間にちよつと会って過ごすそんな日々が。お互いが新鮮な空気の中で泳いで、緊張の糸をほぐす瞬間が。それでね、おかしいんだけど、わたしたちが二人でいる時って、決まってあなたのことを話題に出して、二人で笑っていたの。

結婚して、一緒に暮らすようになって、最初の頃は

すぐく幸せだった。出かける彼にいつてらっしやいつて声をかけて、帰ってきた彼にお帰りと言うのが、嬉しくてたまらなかった。でも、家事に専念して家に一人でいると、不安で心が潰されそうになっていったの。見えないところで、春海が何をしているのか、高校のときのように別の女の手を出しているんじゃないか、わたし一人が彼を愛していて、春海は、ただ機械的にわたしのところに戻ってくるんじゃないのか。一度火がついた疑念はね、どんな水を持ってこようとも消えなかった。努力してくれている春海を信じることができなかつた。わたしが卑小な存在に落ちていくことが耐えられなくなつて、わたしから、彼に別れを切り出したの。彼もそれをすぐに受け入れてくれた。それが、わたしと春海にとってベストな選択だった。

離婚届に判を押したとき、わたしたちは驚くほど気さくに話すことができたの。昔の思い出話、二人が出会った時のこと、正確には、あなたを合わせて三人で遊んだときのこと。映画を見たら、わたしと好人君は感動しているのに春海だけ一人冷めた感想をもらしたり、海に行つて泳げないあなたを、二人で無理やり沖

の方まで連れて行ったり、一緒に読書していたら気が付いたら二人とも寝息を立てていたり、初詣でずっと仲良くいられますようにって手をたたいたことも。全部。

ああ、やっぱり好人がいなくちゃいけないんだって春海が笑ってたよ。後にも先にもあいつだけなんだ、初対面で俺にペンを借りてきたつわものは。だいたい、俺って怖がられる方だから、初対面だとまず避けられやすいんだけど、あいつは、俺に気さくに話しかけてきたんだって。

それを聞いてね、わたしは何だか暖かい気持ちになつたんだよ。それは春海も同じだったと思う。

それにね、今だから言えることだけど、好人君に会ってから、わたしはよく変な夢を見てたんだ。夢の中では、決まってわたしは暗い袋の中に入れられて、ゆらゆら揺れているの。そして、なんだか明るくなつたと思つたら、外に立っていて、カメラを構える好人君の目の前でポーズを取っているんだ。それも瞬く間に移動して、次の景色、次の場所といろんなところで写真を撮られているの。変な夢だったけれど、不思議

な安心感があつた。どんなに辛いことがあつても、夢の中では、わたしの居場所がいろんなどころにある気がして。でも、気が付いたら見なくなつてた。寂しかったけれど、そのときには、隣に春海がいたから。

たぶん、そのときの気持ちの本心だつたんだと思う。あのときのわたしには好人君しか見えてなかったんだと思う。それなのに、わたしは春海を選んだ。間違つているつて後悔なんかしてないけれど、それもあるから、こういう答えに気がついたのかもしれない。

わたしには、あなたが必要だつた。それは、今も昔も変わらない」

冬の夕暮れはすぐに過ぎてゆく。その刹那の夕日に照らされた彼女の頬が赤く染まり、流れる涙が優しい陽を反射する。僕はゆっくり彼女の言葉を体の芯へと通して、答えを口にする。

「ごめん、君の気持ちには答えられない」

「それは、」

「恋人がいるんだ」

僕は叔父のようにはなれなかった。別に吉野さんを忘れるために付き合い始めたわけじゃない。ただ、気



が合って一緒に過ごす日々の中で、凍りついていた僕の一部が、春の息吹で芽を出す草木のように、静かに温められて花咲いていたのだ。

彼女は、笑った。力強い笑顔だった。

「遅かったね、この気持ちに気付くのが」

そうだな、と言って僕も笑顔を作った。

遅くなってごめんね、と彼女は校門の外までついてきてくれた。

送っていく、という申し出は丁重に断られた。学校の戸締りをしなくてはいけないし、それに、二人でいるところに僕の彼女に会って、もしも変な捉え方をされたら困るということだった。

別れ際に、彼女が言った。

「もしも、時間が巻き戻せて、高校二年の、あの夏に戻れたら、今の状況をあのときのわたしに教えてあげられたなら、わたしが好人君を選んでいたら、どうなっていたのかな」

車の方に向って歩いていていた僕は、足を止めて振り返り、彼女の問いに答えた。

「きつと、そうはならないよ。吉野さんは、やつぱり春海を好きになるだろうし、僕は今の道を選んでいたいと思う」

「最初から神様に決められていたみたいにな？」

「いや」と僕は苦笑して首を振った。「吉野さんも春海も負けず嫌いだから。うまくやれる、そう言っ意地を張るに決まっている」

吉野さんは、僕の返答に一拍遅れて怒り、確かに当たっている、と言って笑った。

じゃあね、と僕たちは別れた。互いに、住所は聞かないまま。

長いドライブを終えて、自宅の玄関を開けると、カリーの良い匂いが鼻を通り過ぎて行っった。台所に立っていた彼女が僕の所にかけてきて、箱根駅伝の結果を教えてくれた。どうやら今年の駅伝は最終区まで白熱した戦いが繰り広げられていたようで、興奮しながら話す彼女に相槌を打ちながら部屋着に着替えた。

いつまでも話している彼女に、カレー焦げるんじゃない

ない、と教えてやると、血相を変えて台所のほうに走って行った。

僕はコタツに入って、うたた寝を始めた。

夢を見た。どんな内容か思い出せないけれど。

了

# Oblivescence

初出 『混凝土の隙間と奇譚集』 2008年12月30日 発表

2010年5月9日 公開

著者 彩野

編集人 今出川潤

連絡先 [vert@bugyo.tk](mailto:vert@bugyo.tk)

企画・制作 [ver.T](http://ver.T)

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。  
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。  
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。